

国際情勢変化に伴うオリンピックの役割

The role of the Olympic due to the international situation changes

1K10C041-1 五十川 祐記

主査 石井昌幸 先生

副査 寒川恒夫 先生

【はじめに】

2020年東京オリンピックの開催が決定した。日本国民は大きな経済波及効果、景気上昇を期待し、また世界各国からやってくるスーパースターの競演を心待ちにするだろう。ただオリンピックは現在でこそ、華やかなイメージが先行しているが、長い歴史を紐解いていくと必ずやオリンピックが「平和」の象徴であり、開催都市に大きなメリットをもたらすものとして捉えられていたものではないということがわかる。近代オリンピックが政治的、商業的に利用されてきたというのは、もはや周知の事実であるが、オリンピックがどのような過程を経て、またどのような国際情勢に翻弄させながら、政治的、商業的に姿を変えてきたのか、ということはあまり研究されていないように思える。今回、近代オリンピックが国際政治の歴史の中で、どのようにその役割を変えていったのかを研究し、今後オリンピックはどのような役割を担うべきなのかを考察する。

【第一章】

1896年、第1回アテネ大会が開催され近代オリンピックがスタートし、発展していった19世紀末～20世紀前半は、同時にマスメディア、マスコミュニケーションが飛躍的に発展していった時代であった。そのメディアの飛躍的な発展はオリンピックを世界一のイベントに押し上げていった原動力であった。

第一章では、オリンピックが歴史上初めて明確な政治的目的を持ち、ヒトラー率いるナチス・ドイツによって開催されたとされる1936年ベルリン大会を取り上げる。国際的にナチズムの肯定的なイメージを普及させることに成功したといわれるプロパガンダ利用の実態を紐解く。

【第二章】

第二章では、冷戦が始まり、オリンピックが東西諸国の国力誇示の場として変容していった1950年代～60年代の歴史的事実を取り上げる。そして冷戦に伴い起こったドイツの国家分断問題、当時、圧倒的な強さを誇った社会主義国家のステートアマの実体、中国、台湾の権利主張問題、新興国のオリンピック抗議となった独自のスポーツ競技会「GANEFO」開催の経緯から、この時代のオリンピックと国際政治の密接な関係を考察する。

【第三章】

第三章では、1968年メキシコ大会以降、オリンピックがよりダイレクトな形で政治利用された事実を取り上げる。メキシコ大会における黒人選手による人種差別に対する抗議、ミュンヘン大会におけるパレスチナ・ゲリラによるテロ、モスクワ大会における西側諸国のボイコットなどの問題によって、オリンピックの存在価値が疑われる中、IOCは南アフリカのアパルトヘイト廃止を促す活動を積極的に展開した。IOCの行動は、スポーツの世界のみならず、人種隔離を固定するようなことは許されないという考えを世界の人々に理解させるのに役立ったとされる。

【第四章】

第四章では、1984年ロサンゼルス大会以降、オリンピックが脱政治化を図り、商業的に動き出した経緯、それに伴う弊害を明らかにする。開催規模の拡大に伴う、開催国の経済負担増加、都市開発による環境破壊、勝利至上主義によるドーピング推進、アメリカのテレビ放映権料優先による競技時間の変更などの問題が浮き上がった。しかしその一方オリンピックの商業化は、開催国、開催都市の経済発展に大きな影響を及ぼすようになり、また近年開催されたロンドン大会がエコ五輪として、各国から評価されるなど、オリンピックの開催価値は高まっている。

【おわりに】

近代オリンピックはその時代の国際情勢に翻弄され、いくつもの政治的問題に直面してきた。特に1960年～1970年代はオリンピックの存在が危ぶまれた時代であった。そんな中、IOCのあくまで平和的解決を求める姿勢は少なからず、世界情勢の好転に影響を与えたのではないかと考える。その後、オリンピックの商業化に伴う様々な問題はあるものの、今まさにオリンピックの開催価値は上昇している。その価値をより高める責任がリオデジャネイロ、東京にはあるだろう。また今回、近年のオリンピックの具体的な経済効果、発展途上国を支援するオリンピック・ソリダリティーの役割を研究することができなかったため、これらは今後の課題とする。